

スカイプ・オンライン英会話の授業外利用の効果と課題, 動機づけ —M大学英語専門中級レベル学生の事例—

渡慶次正則¹⁾, Norman Fewell¹⁾, 津嘉山淳子¹⁾, Meghan Kuckelman¹⁾

Motivation, effects and challenges using Skype Online English Conversation out of class —A case of M University English major intermediate-level students—

Masanori TOKESHI¹⁾, Norman FEWELL¹⁾, Junko TSUKAYAMA¹⁾, Meghan KUCKELMAN¹⁾

要 旨

英語を話す機会が極めて少ない日本では、オンライン学習が効率的で普及しやすい方法であると考えた。本研究は、スカイプ・オンライン英会話を講義外の個別学習として用いて、その効果や課題、コミュニケーションへの動機づけ、行われた学習活動を検証することを目的とした。調査対象者は、M大学英語専門科目を受講した中級レベル50人で、1か月間で8回、各25分間オンライン英会話を利用した。利用後の準構造的アンケートと利用記録簿を用いて主にデータを収集し、分析を行った。調査結果は、次の4点が明らかになった。1点目に、オンライン英会話の効果について肯定的な評価が多かった(24項目中15項目で70%から90%の範囲で肯定的な回答)。他の70%以下の肯定的な回答項目(9項目)は、すべて自己の能力に関する評価であり、効果について否定的な回答はなかった。2点目に、特に効果が大きい点(90%以上の肯定的な回答)は、講師の利用学生に対する足場作り(scaffolding)である。講師が好意的に支援をし、講師と利用学生が協同的にコミュニケーションの理解に至ったことが推察される。3点目に、コミュニケーションに対する自信を持つ動機づけになったかについては、結論づけることができなかった。最後に、オンライン英会話のプロジェクト終了後に自主的に利用した学生は皆無であった。結果から明らかになった課題は、利用費、自宅での利用の困難、活動内容の管理と工夫である。

キーワード : eラーニング, NBLT, スピーキング, リスニング, コミュニケーション, ACTFL, Skype

Abstract

It was expected that using online learning was effective and would easily spread in Japanese context where opportunities of speaking in English are extremely limited. This study aims to examine not only effects and challenges as well as motivation for communication, but also conducted activities by using Skype Online English Conversation for individual learning outside the classroom. The 50 intermediate-level participants taking an M University English major class used Online English Conversation eight times, 25 minutes each for one month. The data collected from the semi-structured questionnaire and logbook were analyzed. The results show the followings. First, a majority of responses acknowledged positive effects (rate of 70 % to 90 % positive responses in 15 items out of 24 items). All the responses under 70 % of positive responses were about their own abilities, therefore there were no negative responses. Second,

¹⁾ 名桜大学国際学群 〒905-8585 沖縄県名護市為又1220-1 Faculty of International Studies, Meio University, 1220-1, Biimata, Nago, Okinawa 905-8585, Japan

the most effective aspect (with more than 90 % of positive responses) was Online Conversation teachers' scaffolding for the students. It is suggested that the teachers assisted the students sympathetically, and understanding of conversation was reached through collaboration between teacher and student. Third, it is inconclusive that motivation for confidence in communication was gained. Lastly, there was no student who voluntarily used Online English Conversation after the project. The challenges shown by the results are potential burden of service fees, difficulty using the program at home, also control of activities and necessary adjustments for individual users.

Keywords: e-learning, NBLT, speaking, listening, communication, ACTFL, Skype

1 はじめに

2020年に開催される東京オリンピックへの対応、TOEFL iBT(ETS, 2015)におけるアジア圏の国・地域別スピーキング力の比較で、日本人平均点が最下位である¹⁾などの課題により日本人の英語コミュニケーション能力の早急な伸長が求められている。日本人のTOEFL iBT低得点の主な理由は日本の英語学習環境が外国語としての英語(English as a foreign language)であり、英語を講義以外で日常的に使用する相手や機会が非常に少ないことが指摘される(白井, 2008)。

英語コミュニケーション能力を育成する方法として様々な方法が個人単位、学校単位で試みられている。まず、英語圏留学は最も有効な方法のひとつである(吉村・中山, 2010)。2014年の日本人英語圏留学者数は40,000人余(文部科学省, 2016)²⁾であり、ごくわずかな学生にのみ与えられた機会である(実数としては、1か月未満の留学が半数である)。留学者が少数である理由としては、高額な留学経費が考えられる。一方、日本の大学では、英語コミュニケーション関連の講義で英語母語話者教師とコミュニケーションの機会を持つことは珍しくないが、個別でのコミュニケーションの機会は乏しく、講義外でもほとんどない。

英語学習者が日常生活において、頻繁に、簡単な方法で、かつ安価な学習費でスピーキングを練習できる環境や方法が必要である。本研究で用いたスカイプ³⁾・オンライン英会話(以下、オンライン英会話と略する)は、インターネットに接続できる環境さえ整っていれば、「いつでも」「どこでも」英語母語話者(あるいは英語母語話者に匹敵する講師)とつながり(Kern & Warschauer, 2000)、安価で⁴⁾スピーキングが練習できる方法である。過去の研究はすべてが講義内で利用した事例であり(Ryobe, 2009; 小早川ほか, 2012; 三田, 2014; 永末, 2015)、本研究のように講義外で個別学習としてオンライン英会話を利用した先行研究の事例は文献調査では見つからなかった。

本研究では、「オーラルコミュニケーション」講義の課題の一部として授業外でオンライン英会話を大学生が1対1会話で利用して、次のリサーチ・クエスチョンに答えることを目的とする。

- 1) オンライン英会話は、利用者の英語学習にどのような肯定的な効果を与えたか。
- 2) オンライン英会話を利用した際に英語学習の効果的利用を妨げる要因は何か。
- 3) オンライン英会話を個別利用してどのような学習活動が行われたか。
- 4) オンライン英会話を利用してコミュニケーションの動機づけをどうすれば良いか。

本稿で用いるスピーキングとは会話者同士が意思の授受を行う双方向性のコミュニケーションと同義語として用いる。

2 文献

2.1 コミュニケーションの動機づけ

外国語学習の動機づけは、外国語学習の成否を決める重要な要因のひとつと考えられている(白井, 2008)。個人の努力では外国語能力の伸びにつながりにくい学習年齢や学習適性と異なり、学習者の動機づけは外国語学習の伸長により大きな影響を与えることができる(八島, 2004)。

第2外国語(本稿では英語)を用いての動機づけについて、「他者と対話する意思」(willingness to communicate, 以下WTCと略する)がコミュニケーションに重要であることが先行研究で示されている(MacIntyreほか, 1998)。日本人大学生(N=389)を対象にしたWTCに関するYashima(2002)の調査によると、コミュニケーションへの自信と国際的志向性(国際的な関わりや仕事への関心や態度など)が強いほど、英語でコミュニケーションを行う傾向が強いことを示した。本研究では、オンライン英会話を利用することにより、英語母語話者(相当するレベルの者)とのコミュニ

ケーションの成功体験が自信につながる事が予想された。

2.2 NBLTと自律した学習者

母語話者や教師を中心に行う伝統的な言語学習法に代わり、マルチメディアを用いたコンピュータ支援言語学習 (Computer Assisted Language Learning, 以下CALLと略する) が新しい学習形態として利用されつつある。インターネットの発達に伴い、世界中の人々とネットワークでつながりながらコンピュータを通して学習する、新しい英語教育の形態であるNetwork-based Language Teaching⁵⁾(以下NBLTと略する) が現在、外国語学習で注目されている。NBLTを利用した、「いつでも」「どこでも」外国語学習ができるユビキタス (ubiquitous) の学習環境は自律した学習者を育成するとされる (Kern & Warschauer, 2000)。

2.3 CMCにおける同期型コンピュータ・コミュニケーション

NBLTの一形態としてコンピュータに支援されたコミュニケーションであるCMC (Computer-Mediated Communication) は、相手とコミュニケーションの時間を共有する「同期型 (synchronous) CMC」(SCMC) と、異なる時間でコミュニケーションの時間を共有する「非同期型 (asynchronous) CMC」(ACMC) に大別される (Warschauer, Shezer, & Meloni, 2000)。例えば、リアルタイムで行われるスカイプ会話やチャット、インスタントメッセージは、同期型である。一方、異なる時間でメッセージが交換される電子メールや電子掲示板などは非同期型の例である。本研究で用いたオンライン英会話は、同期型のコンピュータを活用したコミュニケーションである。

2.4 ACTFL OPIによるスピーキング力

オンライン英会話は主にスピーキング能力を伸ばすことを目的とする。本稿では、さまざまなスピーキング能力評価基準の中から、The American Council on the Teaching of Foreign Languages (ACTFL)⁶⁾によるOral Proficiency Interview (OPI) (以下、ACTFL OPIと略する) を用いて調査参加者のスピーキングを検証する。ACTFL OPIを本研究の参照文献として用いる理由は、インタビュー形式で20分から40分の間スピーキングを受験者が行う同テストが、25分間のオンライン英会話と形式が似ており、スピーキング運用能力の基準記述 (specification) が非常に詳細だからである。本研究の調査参加者のほとんどはACTFL OPIガイドラインの「中級一中」と「中級一下」に属すると考えられる。「中級一中」のスピーキングは日常生活の身近な話題が主で、ポーズ、言い直し、自己訂正などが特徴的である。「中級一下」のスピーキングは予測可能な話題について

限定され、頻繁なポーズ、非効果的な言い直しや自己訂正が特徴的である。詳しくは、考察の部分でアンケート結果と比べながら述べる。

ACTFL OPIでは、初級レベルおよび中級レベルの学習者との対話者を好意的な対話者 (sympathetic interlocutor) と記述されており、非母語話者の流暢でない、不正確なスピーキングを忍耐強く聞いてあげたり、ゆっくりと繰り返し、簡単な単語や文型を用いて話したりする。

2.5 オンライン英会話の長所

先行研究では、オンライン英会話を利用した長所についてさまざまな報告がされている。

三田 (2014) の調査対象者20人 (受講者は36人) の中級一下レベルの日本人学生が講義内で14回に渡り、フィリピン人講師を相手に1対1会話で、毎回約25分間、オンライン英会話を有料で利用した。アンケートで最も効果があったと回答したのは、「講師と英語でコミュニケーションをとることに自信がある」(6段階で平均値4.1) である。

92人の日本人大学生と70人のフィリピン人を対象に (日本人学生3人に対してフィリピン学生2, 3人の組み合わせ) 講義内で30分程度、3回無料でオンライン英会話を行った小早川ほか (2012) の調査によると、英語によるコミュニケーションに対する自信は増した効果は示したが、文化や意見の違いを十分に交換するまでには至らなかったと報告している。

オンライン英会話を有料で講義内の1対1会話として利用した日本人大学生55人を対象に調査した永松 (2015) によると、個別指導を行った長所として、学習者が主体的に取り組んだと報告している。

2.6 オンライン英会話の技術的な困難点や課題

オンライン英会話を講義内で利用した調査研究については、その課題や問題についても報告されている。

Ryobe (2009) によると、悪天候やフィリピン人講師の現地側の回線不備による回線接続の悪さ、学生のコンピュータ機器の操作の誤りなどの技術的な問題、大人数でクラス内で実施した場合の回線接続の悪さを報告している。

三田 (2014) の調査でも、回線接続が悪くなったと報告している。さらに、利用者の4分の3以上が自宅でオンライン英会話を利用しておらず、「授業中でなく授業外でスカイプレッスンを行いたい」という希望する回答が皆無であった。その理由で最も多かったのは「家に帰ると疲れてできない」であった。

3 調査方法

3.1 調査対象者

2015年の前期（4月から8月上旬）に開講されたM大学のF（米国出身男性母語話者教師）が担当した「準高等オールラウンドコミュニケーション」（2年生対象、週に90分で1回の講義）の受講生70人から（Aクラス42人受講、Bクラス28人）50人を調査対象として抽出した。抽出した調査対象者は、講義課題であるオンライン英会話の必要回数（8回）とアンケートのすべての質問に回答した学生に限定した。調査対象者の内訳は、Aクラス31人、Bクラス19人である。両クラスとも同一の講師によりオンライン英会話を同じ方法で利用したために、同一の調査対象者として分析を行った。調査対象者は、すべて文系の学部（国際学群）の学生であり、主に英語を専攻もしくは副専攻とする学生が主である。

調査対象者（N=50）の内、男性は21人、女性29人で英語レベルは、英検準1級合格者1人、英検2級合格者22人、英検準2級合格者15人、英検4級以下3人、不明9人で、英検2級から準2級レベルの受講生が中心である。

3.2 調査手法

様々なオンライン英会話プログラムについて、利用システムの便宜さ、教師の数、利用料の安さなどを総合的に検討して、民間会社D社オンライン英会話⁷⁾を「準高等オールラウンドコミュニケーション」の講義課題として利用することを研究グループで合意した。

「準高等オールラウンドコミュニケーション」（Bクラス）は、2015年6月に1か月間、「準高等オールラウンドコミュニケーション」（Aクラス）は2015年7月に1か月間、講義の時間以外でオンライン英会話講師と1対1会話で個人学習として利用し、講義評価の一部として取り扱われた（各自8回、合計200分利用）。D社の英会話講師は、母語話者または母語話者並みの英語運用能力を有するトレーニングを受けた講師である。

ICTについて不安のある学生をICTサポート学生（週1回90分勤務のアルバイト）が支援した。また、コンピュータ以外の機器として、マイク付きヘッドフォンを所持していない学生のために、講義用に用意をした。

実際のコミュニケーションの状況では様々な話題について、準備なし（spontaneous）で意思疎通をしなければならない場合が多い。従って、本研究では実際の状況に近づけるために、学生と講師でフリートーク（unstructured SCMC discussion）をするように指示した。

オンライン英会話の利用中には、管理者用に毎週、教員にD社から管理記録が送付された。D社オンライン英会話は、事前に利用者が予約という形で英語講師を選択し、25分間、英語でフリートークや他の英語活動を

しなければならない。特に制限された期日や利用時間帯はなく、24時間オンラインで利用が可能である。利用後には、logbook（調査参加者の利用記録簿）を用い、利用状況を記録した。オンライン英会話の利用は、大学内での利用というより、自宅で利用した学生がほとんどであった。

オンライン英会話の利用後に、オンライン英会話の先行研究（三田, 2014）で用いたアンケート質問項目に基づいて修正された日本語と英語で併記した準構造的アンケートを実施し（69質問・回答項目、自由回答含む）、ICTの知識や、オンライン英会話利用の長所や短所、利用による英語能力と学習動機づけの変化、利用に対する自由回答などを質問した。

3.3 分析方法

調査後に、アンケート、利用管理記録、logbook を分析した。アンケート結果は数値をEXCELにて集計し、logbook については内容により分類した。

3.4 倫理

調査対象者は、アンケート用紙で調査の趣旨を理解し、調査に参加することに同意した学生のみが対象となっており、参加の意思について配慮をした。また、オンライン英会話業者であるD社については、調査目的でオンライン英会話利用方法についての情報交換に関係する部分を用いることを、Eメールにて承諾を得た。

4 結果と分析

4.1 結果

下記では、前半はアンケートの回答結果とlogbook（利用記録簿）の結果を示し、後半はリサーチ・クエスチョン等に関連する点について調査データと先行研究を比較参照しながら考察を行う。

4.1.1 オンライン英会話利用への期待

次頁の表1は、「オンライン英会話を使用した時に期待したこと」に対する質問への回答を多い順に並べてある（最もあてはまる項目を各自が3つ選択）。最も回答の多い項目は、「英語を話す力を高めたい」で86.0%（50人中43人）で突出している。調査参加者は「オールラウンドコミュニケーション」の講義を受講しており、講義の目的に合う項目を選択しているのは自然な結果である。他の回答項目については、約30%以下であり、突出している項目はない。例えば、2番目に多く選択された項目は、「発音を良くしたい」30.2%（50人中16人）と「グローバルな現代社会（英語は国際語として）について学びたい」30.2%（50人中16人）であり、3番目に多い項目は「リスニング力を伸ばしたい」26.0%（50人中13人）と続いている。

表1：オンライン英会話を使用した時に期待したこと(問7：各自3つを複数選択。回答の多い順に上から並べられている)

| 回答項目 | 人数 (総数50人) |
|--------------------------------------|---------------|
| 英語を話す力を高めたい(質問7.1) | 43 |
| 発音を良くしたい(質問7.2) | 16 |
| グローバルな現代社会(英語は国際語として)について学びたい(質問7.6) | 16 |
| 英会話をもっと楽しみたい(質問7.9) | 13 |
| リスニング力を高めたい(質問7.3) | 12 |
| 異文化の人たちと交流したい(質問7.8) | 11 |
| 将来留学するための準備(質問7.5) | 10 |
| TOEICの点数をあげたい(質問7.4) | 4 |
| 海外のことをもっと知りたい(質問7.10) | 1 |
| 就職した後に困らないように(質問7.7) | 0 |
| 他(質問7.11) | 24 |
| 合計 | 150 (回答合計) |

4.1.2 スカイク利用経験とコンピュータ環境, ICT能力

本研究ではオンライン英会話を授業外で個別学習する前提条件となるスカイクの利用経験やICT能力, 教室外で利用する自己のコンピュータ環境が利用の妨げとなっていないかを確認をした。

表2：調査参加者のスカイク利用経験、コンピュータ環境とICT能力

| | |
|---------------------------------------|---|
| 問い(質問4)：どのくらいの頻度でスカイクを利用しますか。 | |
| 回答 | 頻繁24人 時々20人 まったくない6人 合計50人 |
| 問い(質問5)：あなたのICTのスキルについて該当するものを選んでください | |
| 回答 | とても高い1人 結構高い4人 中くらい22人 結構低い4人 低い14人 合計50人 |
| 問い(質問6.1)：自宅にウェブカメラが付いたパソコンがある | |
| 回答 | はい45人 いいえ5人 合計50人 |
| 問い(質問6.2)：カメラが内蔵されたスマートフォンを持っている | |
| 回答 | はい44人 いいえ6人 合計50人 |
| 問い(質問6.3)：大学のコンピュータでしかスカイクを利用できない | |
| 回答 | はい4人 いいえ46人 合計50人 |

上の表2によると、約90%の調査参加者がオンライン英会話を行うコンピュータ環境やスカイク利用経験が整っている。具体的には、日常生活でのスカイク(質問4)に対して、50人中44人(頻繁：24人、時々：20人)がスカイクを利用すると回答している。さらに、自宅にウェブカメラのあるパソコンがある(質問6.1)に対して50人中45人が「はい」と回答、カメラが内蔵されたスマートフォンを持っている(質問6.2)に対しては50人中44人が「はい」と回答、大学のコンピュータでしかスカイクを利用できない(質問6.3)に対しては、回答者50

人中46人が「いいえ」を選択、つまり大学のコンピュータに頼らないでスカイクを利用できることを示している。

調査参加者の「ICTスキル(質問5)」(表2)の自己評価については、高いと回答した者が5人(とても「高い」1人、「結構高い」4人)に対して、18人が低いと回答(「結構低い」4人、「低い」14人)している。語学系の学生が調査対象者であるために、ICT能力は高くないが、調査対象者の50人すべてが8回利用の課題を終了していることを考慮すれば、スカイクを利用する能力は十分にあったと推測した。

4.1.3 オンライン英会話利用の困難点

オンライン英会話を利用した時に、困難に感じた点を下の表3に示している(各自3つを複数選択)。最も困難に感じた点は、「何を話したらいいかわからない」(50人中29人, 58%),次に「家に帰ると疲れてできない」50.0%(50人中25人),「講師とうまく会話を続ける自信がない」40.0%(50人中20人),「スカイク講師がどのような人かわからないので不安」36%(50人中18人)となっている。

技術的な困難点は、「自宅でスカイク接続方法が分からない」20%(50人中10人)であり、サポートなしでの個人学習については、「自宅では授業中のようなサポートがない」12%(50人中6人)と回答している。

表3：オンライン英会話を使用した時に困難に感じた点(問8：各自3つを複数選択。回答の多い順に上から並べられている)

| 回答項目 | 回答数 |
|--------------------------------|-----|
| 何を話したらいいかわからない(質問8.7) | 29 |
| 家に帰ると疲れてできない(質問8.1) | 25 |
| 講師とうまく会話を続ける自信がない(質問8.6) | 20 |
| スカイク講師がどのような人かわからないので不安(質問8.5) | 18 |
| 自宅でスカイク接続方法が分からない(質問8.3) | 10 |
| 自宅では授業中のようなサポートがない(質問8.9) | 6 |
| どの教材を使うか決められない(質問8.8) | 4 |
| 他に英会話の機会が十分ある(質問8.2) | 1 |
| レッスン予約方法が分からない(質問8.4) | 0 |
| 他(質問8.10) | 37 |
| 合計 | 150 |

4.1.4 オンライン英会話のコミュニケーション能力や学習動機づけ、英語能力などの効果

オンライン英会話を利用後にコミュニケーション能力や動機づけなどの効果について尋ねた(質問8)回答結果である。下は回答項目(Q1からQ24)の記述で、回答項目から最もあてはまる項目を3つ、5段階のリッカート尺度で選んだ結果が表4である。「同意しない」または「強く同意しない」という否定的な回答は少なかったために、以下では、肯定的な回答が特に多い項目(90%

以上)と肯定的な回答がやや多い項目(70%から80%),肯定的な回答が少ない項目(60%以下)に分別して説明する。顕著な傾向がある肯定的な回答が特に多い項目と少ない項目については、詳細に説明し、肯定的な回答がやや多い項目については概略を説明する。

＜肯定的回答が特に多い項目(90%以上)＞

- (Q 2) 講師の話が聞き取れないときに聞き返すことができる
- (Q 3) 講師が話している単語が分からないときに、その単語を聞いて教えてもらうことができる
- (Q 8) 自分の発音を講師に直してもらった時には、正確に言い直すことができる
- (Q 9) 自分が話すとき講師が聞き取りやすい声の大ききで話せる

＜肯定的回答が少ない項目(60%以下)＞

- (Q 4) 講師と雑談するときに途中で沈黙せずに会話を続けられる
- (Q 5) 講師と雑談する内容を苦勞せずに準備することができる
- (Q 6) 講師と雑談するため用意した内容と違う方向に進んでもスムーズに会話できる
- (Q10) 講師と英語で円滑なコミュニケーションをとることができる
- (Q12) 講師と英語でコミュニケーションをとることに自信がある
- (Q14) 講師と話することで、様々な異なる意見を講師に教えてあげることができる
- (Q23) 講師と話することで外国人と接することに抵抗がなくなった
- (Q24) 講師と話することでTOEICの勉強をもっとがんばろうと思った

4.1.4.1 オンライン英会話の効果に肯定的な回答が多い項目

下の表4によると、オンライン英会話の効果について質問した24項目の内、15項目は70%から90%の割合で肯定的な回答があり、調査参加者は効果について比較的高い評価を示している。以下では、特に肯定的な回答が多い項目(90%以上)と肯定的な効果がやや多い項目(70%から80%)に分けて説明する。

表4によると、肯定的な回答の特に多い項目(「強く同意する」と「同意する」の合計で約90%以上)は次の4項目(Q 2, Q 3, Q 8, Q 9)である。つまり、「(Q 2) 講師の話が聞き取れないときに聞き返すことができる」96%(計48人:21人+27人),「(Q 3) 講師が話している単語が分からない時に、その単語を聞いて教えてもらうことができる」96%(計48人:21人+27人),「(Q 8) 自分の発音を講師に直してもらった時には、正確に言い直すことができる」94%(計47人:17人+30人),「(Q 9) 自分が話すとき講師が聞き取りやすい声の大ききで話せる」94%(計47人:19人+28人)である。

4.1.4.2 オンライン英会話の効果に肯定的な回答がやや多い項目

表4に基づき、オンライン英会話の効果に対して肯定的な回答(「強く賛成する」と「賛成する」の合計)の選択が70%から80%の項目については、やや肯定的な回答が多いと分類して説明する。各項目別に肯定的な回答の割合と合計人数を項目の後に続く括弧内に示してある。表4によると、肯定的な回答がやや多いのは、次の分野である。自己の英語力の伸びについて、リスニング(Q 1),発音(Q 7),総合的英語力(Q11)の項目について肯定的な回答が多い。さら異文化理解の動機づけ

表4：オンライン英会話のコミュニケーションや学習動機づけ、英語能力などへの効果(Q 1-12)

| 回答の頻度 | 肯定的回答が特に多い項目 | | | | 肯定的回答がやや多い項目 | | | 肯定的回答が少ない項目 | | | | |
|---------|--------------|-----|-----|-----|--------------|-----|------|-------------|-----|-----|-----|-----|
| | Q 2 | Q 3 | Q 8 | Q 9 | Q 1 | Q 7 | Q 11 | Q 4 | Q 5 | Q 6 | Q10 | Q12 |
| 強く同意する | 21 | 21 | 17 | 19 | 9 | 10 | 16 | 10 | 9 | 8 | 12 | 6 |
| 同意する | 27 | 27 | 30 | 28 | 31 | 29 | 25 | 20 | 13 | 22 | 20 | 13 |
| どちらでもない | 1 | 1 | 2 | 2 | 7 | 8 | 9 | 8 | 15 | 11 | 9 | 14 |
| 同意しない | 1 | 1 | 1 | 1 | 3 | 3 | 0 | 10 | 13 | 9 | 8 | 12 |
| 強く同意しない | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 1 | 5 |
| 合計 | 50 | 50 | 50 | 50 | 50 | 50 | 50 | 50 | 50 | 50 | 50 | 50 |

表4(上表の続き)：オンライン英会話のコミュニケーションや学習動機づけ、英語能力などへの効果(Q13-24)

| 回答の頻度 | 肯定的回答がやや多い項目 | | | | | | | | | 肯定的回答が少ない項目 | | |
|---------|--------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------------|-----|-----|
| | Q13 | Q15 | Q16 | Q17 | Q18 | Q19 | Q20 | Q21 | Q22 | Q14 | Q23 | Q24 |
| 強く同意する | 21 | 18 | 21 | 22 | 22 | 14 | 20 | 17 | 25 | 10 | 14 | 9 |
| 同意する | 15 | 21 | 19 | 19 | 14 | 24 | 22 | 27 | 18 | 17 | 10 | 12 |
| どちらでもない | 11 | 9 | 10 | 9 | 14 | 12 | 8 | 6 | 7 | 18 | 21 | 17 |
| 同意しない | 3 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 5 | 5 | 11 |
| 強く同意しない | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 合計 | 50 | 50 | 50 | 50 | 50 | 50 | 50 | 50 | 50 | 50 | 50 | 50 |

については、さまざまな異なる意見を聞いて学べる (Q13)、海外への文化を学びたい (Q16)、海外に友達を作りたい (Q17)、海外に行ってみたい (Q18) と肯定的な回答が多い。さらに、英語学習への動機づけについては、英語の発音 (Q19)、英文法の学習 (Q20)、リスニングの練習 (Q21)、英会話の練習 (Q22) に肯定的な回答が多い。

＜肯定的な回答がやや多い項目 (肯定的な回答が70%から80%) とその割合と人数の一覧＞

- (Q1) 講師が話していることが理解できる (80%, 計40人[9+31])
- (Q7) 講師と話すときに自分の発音で正確に通じている (82%, 計41人[16+25])
- (Q11) 講師と会話することで、自分の英語力を向上させられる (78%, 計39人[10+29])
- (Q13) 講師と話すことで、様々な異なる意見を聞いて学ぶことができる (78%, 計39人[21+15])
- (Q15) 講師と話すことで、英語をもっと勉強したくなる (78%, 計39人[18+21])
- (Q16) 講師と話すことで、海外文化についてもっと学びたくなる (80%, 計40人[21+19])
- (Q17) 講師と話すことで、海外に友達を作ろうと思いたくなる (82%, 計41人[22+19])
- (Q18) 講師と話すことで、海外に行ってみたいと思うようになる (72%, 計36人[22+14])
- (Q19) 講師と話すことで英語の発音の練習をもっとやろうと思う (76%, 計38人[14+24])
- (Q20) 講師と話すことで英文法の学習をもっとやろうと思う (84%, 計42人[20+22])
- (Q21) 講師と話すことでリスニングの練習をもっとやろうと思う (88%, 計44人[17+27])
- (Q22) 講師と話すことで英会話の練習をもっとやろうと思う (86%, 計43人[25+18])

4.1.4.3 オンライン英会話の効果に肯定的な回答が少ない項目

表4によると、肯定的な回答の少ない項目(「強く同意する」または「同意する」の合計で約60%以下、かつ「同意しない」または「強く同意しない」を多く含む)は、次の8項目(Q4, Q5, Q6, Q10, Q12, Q14, Q23, Q24)である。同様な内容の項目に分類して説明する。

まず、オンライン英会話利用後に英語でのコミュニケーションへの自信や外国人への抵抗感について肯定的な回答は少ない。上の表3で示されたオンライン英会話の困難点で、「講師とうまく会話を続ける自信がない」40%と同様な結果となっている。つまり、表4では「(Q

12) 講師と英語でコミュニケーションをとることに自信がある」に対して肯定的な回答は38% (計19人: 6人+13人)と同じ傾向を示している。さらに、「(Q23) 講師と話すことで外国人と接することに抵抗がなくなった」については、肯定的な回答の選択は48% (計24人: 14人+10人)で外国人に対する抵抗感が克服されたとは言い難い。

次に、ACTFL OPI中級レベルのスピーキングで困難とされる不測の事態を伴う対人交流の場面、つまり準備なしの即興的な英会話や話題の柔軟性については、肯定的な回答は少ない。オンライン英会話の困難点を示した表3の結果でも「何を話したらいいかわからない」(50人中29人, 58%)と同様な結果を示している。表4では、「(Q5) 講師と雑談する内容を苦勞せずに準備することができる(即興的な話題への対応)」に対して肯定的な回答は44% (計22人: 9人+13人)である。「(Q6) 講師と雑談するために用意した内容と違う方向に進んでもスムーズに会話できる(話題の柔軟性)」に対して肯定的な回答は60% (計30人: 8人+22人)である。

さらに、ACTFL OPI中級レベルのスピーキングで困難とされる英会話の流暢さ、または不自然な沈黙がなく継続できる点については、肯定的な回答が少ない。具体的には、「(Q4) 講師と雑談するときに途中で沈黙せずに会話を続けられる」に対する肯定的な回答は60% (計30人: 10人+20人)である。「(Q10) 講師と英語で円滑なコミュニケーションをとることができる」に対して肯定的な回答は64% (計32人: 12人+20人)である。

他の肯定的な回答が少ない項目として、「(Q14) 講師と話すことで、様々な異なる意見を講師に教えてあげることができる」については、肯定的な回答の選択は54% (計27人: 10人+17人)と低い自己評価を示しており、オンライン英会話を通して自己の考えを十分に発信できた調査参加者は多くはない。

4.1.5 オンライン英会話の総合的な評価

オンライン英会話を利用して、総合的な評価を回答項目から最もあてはまる項目を3つ、5段階のリッカート尺度で選んだ結果が表5(質問10)で、講義で利用後にオンライン英会話を自主的に利用したいか意思を調べた回答結果が表6(質問11)である。表5の回答結果は、オンライン英会話の長所である「いつでも」「どこでも」英語母語話者とつながる(Kern & Warschauer, 2000)という利点に対しては本プロジェクトで期待したほど、肯定的な回答が多いと言い難い。表6の結果も、自主的にオンライン英会話を利用したいという自律的な学習の動機づけに成功したとは言いがたい。

表 5 : オンライン英会話を利用した後の総合的な自己評価(質問10)

| 項目 | Q 1 | Q 2 | Q 3 | Q 4 |
|---------|-----|-----|-----|-----|
| 強く同意する | 17 | 16 | 16 | 17 |
| 同意する | 21 | 15 | 20 | 23 |
| どちらでもない | 10 | 11 | 10 | 8 |
| 同意しない | 2 | 5 | 1 | 2 |
| 強く同意しない | 0 | 3 | 3 | 0 |
| 合計 | 50 | 50 | 50 | 50 |

(Q 1) オンライン英会話でネイティブ話者とオンラインでスピーキングを練習することは通常のオーラルコミュニケーションの講義より役に立った

(Q 2) 自分の都合に合わせて、オンライン英会話を利用できる

(Q 3) 自分が利用したい時間にオンライン英会話を利用できること

(Q 4) 自分の好きな講師を選ぶことができる

表 6 : 講義での利用後にオンライン英会話を自主的に利用する意思についての回答 (質問11)

| | |
|-----------------------------|-----|
| (1) できるだけ毎日受けてみたい | 3人 |
| (2) 週に1回～2回は受けてみたい | 33人 |
| (3) 講義外ではオンライン英会話を受けたいと思わない | 14人 |
| 合計 | 50人 |

上の表5では、「自分の都合に合わせて、オンライン英会話を利用できる(Q2)」の項目については、肯定的な回答は62%(計31人:16人+15人)と高くはなく、「自分が利用したい時間にオンライン英会話を利用できること(Q3)」に対しては、肯定的な回答は72%(計:36人:16人+20人)である。上の表3では、「家に帰ると疲れてできない」50.0%(50人中25人)と回答しており、自由回答でも「アルバイトで忙しくて時間の確保が難しい」とコメントしている。三田(2014)の調査でも自宅での利用がほとんどなかった最も多い理由は「家に帰ると疲れてできない」であった。本研究の自宅での利用は予想より困難であったと考えられる。

一方、「オンライン英会話でネイティブ話者とオンラインでスピーキングを練習することは通常のオーラルコミュニケーションの講義より役に立った(Q1)」の項目に対して肯定的な回答は76%(計38人:17人+21人)で、全体的にある程度の高い評価をしていると言える。

特に、「自分の好きな講師を選ぶことができる(Q4)」の項目に対しては、肯定的な回答は80%(計40人:17人+23人)で、利用者が好みの講師を選択できるオンライン英会話のシステムに対する高い評価であると解釈する。上の表3では、「スカイプ講師がどのような人かわからないので不安」36%(50人中18人)と不安も示しているが、自由回答では「レッスンを始める前は緊張したが、楽しく会話できた」と記述された回答が多く、表5が示すように講師に対しては満足度が高かったと考えられる。

上の表6では、「できるだけ毎日受けてみたい」と回

答した学生は3人のみであり、半数以上(33人,66%)は「週に1回～2回は受けてみたい」と回答している。一方、「講義外ではオンライン英会話を受けたいと思わない」と回答した学生が14人(28%)は、講義内でのオンライン英会話の利用を望んでいると解釈できる。

4.1.6 オンライン英会話の活動内容

表 7 : Logbook (利用記録簿) に記録されたオンライン英会話の活動内容 (50人×8回=400)

| 活動内容 | 活動数 |
|--------------------------------------|-----|
| (1) 身近な人々や場所(家族や友人、学校など)や自分の日常の行動 | 51 |
| (2) 地元の観光や食べ物、伝統行事など | 28 |
| (3) 趣味や興味のあること(映画、ペット、歌、旅行、スポーツなど) | 48 |
| (4) 英語の勉強法(講師からのアドバイス) | 41 |
| (5) 日本語や英語の言語について | 11 |
| (6) 講師の国(フィリピンやセルビア、クロアチア)と日本の比較 | 71 |
| (7) 日本の文化や歴史、生活、行動様式など | 24 |
| (8) 海外のことについて | 9 |
| (9) 講師が用意したレッスン(英作文、文法、発音、単語クイズなど) | 94 |
| (10) その他(インターネット回線で活動ができない、または内容が不明) | 23 |
| 合計 | 400 |

調査参加者が記録したlogbook(利用記録簿)からオンライン英会話の活動内容を集計したのが上の表7である。活動については、重なる部分も多かったが、主な活動を基準に分類した。講師に対する利用者の自己紹介についてはほとんどで記録されてあるので、必然的な活動として省略してある。項目(1)から項目(8)まではフリートーカーの話題である。フリートーカーの話題としては身近な話題については、31.8%(計127:項目(1)51+項目(2)28+項目(3)48)で最も多い。次に多い話題は、講師の出身国と日本の比較(項目6:71)や日本の紹介(項目7:24)で合計23.8%(95)である。さらに、講師から英語の勉強法のアドバイス(41:10.3%)を受けていることも特徴的である。

本研究の講義課題としては、スピーキングをするように指示したが、(9)の項目はオンライン英会話の講師により用意された英作文、文法、発音、TOEICなどのレッスン(94:23.5%)を行っている。上の表3では、最も困難な項目として「何を話したらいいかわからない」(50人中29人,58%)と回答しており、フリートーカーを行うことが困難であった学生が多かったことが推測される。

4.2 考察

上で示された調査結果について特徴的な点について焦点化して以下で考察する。

4.2.1 オンライン英会話の効果

オンライン英会話の効果について、表3が表すように質問8の24項目の内、15項目は70%から90%の割合で肯定的な回答をしている。他の肯定的な回答が少ない項目については、コミュニケーションへの自信や流暢さ、即興的話題への対応など調査対象者自身への自己評価であり、オンライン英会話への評価ではないことから、概ね肯定的な回答が多かったと言える。

本研究で肯定的な回答が特に多かった4項目(90%以上)については、オンライン講師の援助や好意的な態度がコミュニケーションの足場作り(scaffolding)(Vygotsky, 1987)として効果があったと考える。つまり、第2言語習得研究を参照して解釈すると、「(Q2)講師の話が聞き取れないときに聞き返すことができる」は、理解の確認と明確化の要求(Long, 1985; Pica et al., 1987)である。「(Q3)講師が話している単語が分からない時に、その単語を聞いて教えてもらうことができる」はforeigner talk(Chaudron, 1983)である。スカイプ・オンライン英会話では、音声のチャットに加えて、テキストのチャットを用いて不明確な単語のつづりを教えてもらえる利点もある。さらに、「(Q8)自分の発音を講師に直してもらった時には、正確に言い直すことができる」と「(Q9)自分が話すときに講師が聞き取りやすい声の大きさと話せる」については、ACTFL OPI中級レベルの基準で示されているように、非母語話者の対応に慣れた好意的な話者(オンライン講師)と流暢さと文法や発音の正確さに欠ける調査参加者の間で起こったコミュニケーションの問題に対して、意思疎通のための協同作業(Hatch, 1978)⁸⁾があったと推測される。さらに、上の表7では会話の話題として、「講師から英語の勉強法のアドバイス」(10.3%)を受けていることも、講師が受講学生を支援したことを裏付けている

4.2.2 オンライン英会話とコミュニケーションの動機づけ

前述したように、先行研究で外国語でのコミュニケーションでは動機づけが重要であると述べられている。オンライン英会話に関する先行研究でも、コミュニケーションへの「自信」を持つ(小早川ほか, 2012; 三田, 2014)と成果を報告しているが、さらに詳細に検証される必要はあるだろう。前述したように、三田(2014)の調査では統計的な処理で「講師と英語でコミュニケーションをとることに自信がある」が最も効果があったと結論づけているが、調査対象者が20人で少数であり、平均値が4.1(6段階)で他の回答平均値と比べても最低に近い。小早川ほか(2012)の調査結果でも、統計的な処理で「相手と英語でコミュニケーションをとることに自信がある」を効果として報告しているが、平均値は3.1(5段階)ですべての回答項目で最も低い。

本研究では、表4によると、次の2点に対する肯定的な回答は「(Q12)講師と英語でコミュニケーションをとることに自信がある」(38%)、「(Q23)講師と話すことで外国人と接することに抵抗がなくなった」(48%)である。数値的には低いですが、アンケートの自由回答を確認するとほとんどの調査参加者がコミュニケーションに対して積極的なコメントを書いている(表5の「オンライン英会話でネィティブ話者とオンラインでスピーキングを練習することは通常のオールラウンドコミュニケーションの講義より役に立った(Q1)」に「同意しない」2名を除く)。この結果については、結論を出すことは難しい。推測される変化としては、英語でのコミュニケーションへの「自信」を持ったり、「抵抗感」を取り除くまでには至らなかったが、「不安」については軽減されたかもしれない。自由回答では「楽しかった」というコメントが多く、講師に対する肯定的な回答(表5のQ4で80%)も高いことから、オンライン英会話の活動に満足したことにより、内発的動機(Deci & Ryan, 1985)は高められたかもしれない。短期間のオンライン英会話利用でコミュニケーションへの自信を持つことは困難であると考えられるので、この点については長期間の再調査の必要がある。

4.2.3 オンライン英会話の活動内容とレベル

本研究では、フリートーキングの話題となったのは、表7が示すように身近な話題(家族や友人、学校、自分の日常の行動、地元の観光や食べ物、伝統行事など趣味や興味など)で合計31.8%と初対面の外国人同士が話題にしやすいただろう日本と講師の国の文化や伝統、生活の紹介は合計23.8%となっており、両方を合わせると半数以上が身近で、馴染みのある話題となっている。話題の内容は、ACTFL OPIガイドラインの「中レベルー中」⁹⁾か「中レベルー下」¹⁰⁾レベル記述とほぼ一致している。

オンライン英会話を利用する目的が、英語コミュニケーションの不安を取り除き、フリートーキングに慣れることであるなら、ある程度の目的は果たせたと考える。仮に、より困難なタスク(例:ACTFL OPI「中級レベルー上」「上級」レベル)に挑戦させるのであれば、スカイプ・オンライン英会話の業者と交渉をして、フリートーキングに加えて、課題のタスクを利用者と講師が協同して取り組むプログラムが必要だろう。

4.2.4 オンライン英会話の困難点と今後への示唆

本研究では、「いつでも、どこでも英会話が母語話者と練習できる」オンライン学習の長所を利用して、調査で利用後も学習者が費用を自己負担して継続利用することを期待した。しかし、オンライン英会話を利用後に、2015年後期(10月から翌年2月上旬まで)にオンライン

英会話を自主的に利用した人数を追跡調査したところ皆無であった。先行研究でも、講義外ではオンライン英会話の自主的利用は困難であると報告している (Ryobe, 2009; 三田, 2014; 永末, 2015)。本研究でも表6が示すように、「講義外ではオンライン英会話を受けたいと思わない」と回答した学生が14人 (28%) おり、効果を認めつつも講義外での利用を望まない利用者は少なくない。

講義外で個別学習としてオンライン英会話でさらに効果をあげるには、次の課題が指摘できる。

第1に、利用費を大学側と利用学生のどちらが負担するかの問題である。本研究では、前述した研究助成金より1か月、8回分の利用費を支払った。通常の講義で利用する料金を大学側で負担することは現実的に無理である。先行研究でも三田 (2014) は「費用は1万円ではなく無料にしてほしい」¹¹⁾の回答が多かったと報告している。永松 (2015) は、大学側がオンライン英会話の利用費を負担したことにより、積極的な利用があったが、自主的に継続して利用する事には予算面で不安があると指摘している。自己負担して利用する必要性や状況設定が必須である。

第2に、自宅でオンライン英会話を利用することの難しさと、大学側で利用体制を整える必要性である。本研究では、50.0% (50人中25人) が「家に帰ると疲れてできない」と回答しており、三田 (2014) も同様な報告をしている。アルバイト等で多忙な現代の大学生の現状を反映している。さらに、個人学習に対する自己管理の難しさもあると考える。解決策としては、大学の施設で防音の¹²⁾スピーキング用の個室を多数設置し、オンライン英会話の利用時間を講義ごとに確保して、コンピュータ支援員を常駐することが必要だと考える。

最後に、オンライン英会話の活動内容を構造化する必要性である。本研究では、英会話を課題として与えたにもかかわらず、レッスン (英作文や文法など) を行った活動が23.5% (表7) であった。講義外での利用では管理が行き届かない短所である。表4で示すように、さまざまな話題に予測できない展開を伴うフリートーキングすることは、より高いレベルのスピーキングであり、初級や中級レベルの学習者には難しいタスクである。前述したように、フリートーキングに加えて、活動に講師から指定されたタスクをある程度構造化して取り組ませる必要がある。

5 結論

本研究プロジェクトは、英語スピーキングの機会が少ない外国語学習の不利な状況を解決するために、「いつでも、どこでも母語話者と会話できる」オンライン英会話を利用することによりその有用性に気づき、利用後に

自主的に利用することを目的とした。

本研究の結論として、以下の4点でまとめる。

1点目に、オンライン英会話の効果については肯定的な評価が多かった (24項目中15項目で70%から90%の範囲で肯定的な回答)。肯定的な回答が少なかった項目は、ほとんどが自己の能力に対する自己評価であり、効果について否定的な回答はほとんどなかった。

2点目に、オンライン英会話の特に効果が大きい点 (90%以上の肯定的な回答) として結果によって示されたのは、講師の利用学生に対する足場作り (scaffolding) である。「聞き返すことができる」、「単語を教えてもらう」、「正確に発音を言い直すことができる」、「聞き取りやすい声の大ききで話せる」などの点について講師が好意的に支援をし、講師と利用学生が協同的にコミュニケーションの理解に至ったことが伺える。

3点目に、オンライン英会話を用いたことによって、コミュニケーションに対する自信を持つ動機づけになったかについては、結論付けることができない。アンケートの質問への肯定的な回答は少ないが、自由回答ではコミュニケーションに対する積極的な態度を示すコメントが多く、矛盾した結果となった。

最後に、オンライン英会話のプロジェクト終了後に自主的に利用する学生は皆無であった。結果から明らかになった課題は、利用費、自宅での利用の困難、活動内容の管理と改善である。

本研究は、短期間での調査であり、施設面の整備にも課題があった。今後はより長期間、オンライン・スピーキングを利用できる学内施設を整えてオンライン英会話の有効性について検証したい。

注

- 1) ETS社が発表したTest and Score Data summary for the TOEFL iBT (2014-2015) によると、スピーキング (30点満点) で日本人平均点は17点で、アジア地区30か国・地域で僅差ではあるが最下位である。中国人平均点は19点、韓国人平均点は20点、台湾人は20点で近隣の同様な経済、言語環境の国々より低い。
- 2) 文部科学省に報告によると、2014年の日本人英語圏留学生は、高等教育機関に所属する者で、米国に18,769人、カナダに7,373人、オーストラリアに7,276人、英国に6,864人が留学した。1か月未満から1年以上の留学生を含んでおり、期間は幅が広い。
- 3) スカイプ (Skype) は、マイクロソフト社が開発し、音声チャットとテキスト (文字) チャット、ビデオメッセージを同時に双方向性交換できる無料アプリケーション・ソフトウェアでコンピュータや携帯電話、iPadで使用が可能である。

- 4) 例えば、D社のプランによると毎日25分利用し、一か月で利用料金は、4,950円であり、1年間毎日利用しても、6万円弱の費用である。
- 5) CALLやeラーニングは、コンピュータやCD、DVD、iPadなどのマルチメディアを利用した外国語学習に用いられる総称であるため、インターネットのネットワークに限定したNBLTと区別して本稿では用いる。
- 6) ACTFLのレベルはそれぞれ4技能ごとに、卓越級 (distinguished), 超級 (superior), 上級の上 (superior-high), 上級の中 (superior-mid), 上級の下 (superior-low), 中級の上 (intermediate-high), 中級の中 (intermediate mid), 中級の下 (intermediate low), 初級の上 (novice high), 初級の中 (novice mid), 初級の下 (novice low) の11レベルがある。
- 7) D社のスピーキングテストは、単語や文章の音読の正確さを測定する方法であり、スピーキングやりとりの測定には適していないと判断して、利用しなかった。業者としてDMM.comスカイプ・オンライン英会話を選択した。他に「レアジョブ」などのスカイプ・オンライン英会話業者がある。詳しくは、「スカイプ・オンライン英会話スクールの歴史」(<http://www.ecominc.co.jp/blog/2013/02268/>)を参照。
- 8) Long (1985) は母語話者によるmodified interactionが習得につながるとInteraction Hypothesisを主張した。Pica et al. (1987) はcomprehension check, clarification request, confirmation checkの効果について調査した。foreigner talkは、母語話者が非母語話者に対して簡単な文型や単語、反復を用いること。
- 9) 「中級-中」の話者は、簡単な交流場面において、様々な複雑でないコミュニケーション・タスクをうまくこなすことができる。会話は、一般的に、目標文化圏で生活するのに必要なよく起こりうる具体的なやり取りに限られる。そのような会話には、自分や家族、家 (家庭)、日常の活動、興味、自分の好みなどに関連した自分にまつわる情報、さらに、食べ物、買い物、旅行、宿泊などといった物質的、社会的なニーズが含まれる。(ACTFLスピーキング・ガイドライン抜粋)
- 10) 「中級-下」の話者は、簡単に明瞭な交流場面において、言語を使って自分が言いたい事を表現することによって、限られた数の複雑でないコミュニケーション・タスクを処理することができる。会話は、目標言語文化圏において生活するのに必要な具体的なやり取りや予測可能な話題のいくつかに限られる。これらの話題は、基本的な個人についての情報に関連したものである。例えば、自分や家族のこと、日常の活動、自分の好み、また、食べ物の注文や簡単な買い物といった身近なニーズなどである。(抜粋)
- 11) 三田の研究実践では、14回のオンライン英会話の利

用料として、5,000円を大学が負担し、10,000円を受講生が負担した。

- 12) 防音施設のない教室で複数の学生が同時にオンライン英会話を用いた三田 (2014) の調査では、「隣の声気が気になった」とのコメントが報告されている。

謝辞

本研究は、名桜大学総合研究所平成27年度一般研究助成金を利用して実施された。事務処理や支援した頂いた事務職員の方々に感謝いたします。DMM.com英会話の担当者には利用学生のスカイプ・アカウントやEメールを作成して頂き、無事プロジェクトが終了することができました。紙面を借りて御礼申し上げます。

引用文献

- ACTFL日本語版 (2012) 『ACTFL 言語運用能力ガイドライン2012年版スピーキング』
<https://www.actfl.org/publications/guidelines-and-manuals/actfl-proficiency-guidelines-2012/japanese/%E3%82%B9%E3%83%94%E3%83%BC%E3%82%AD%E3%83%B3%E3%82%B> (2016年8月29日取得)
- Chaudron, C.(1983). Foreigner Talk in the classroom- An Aid to Learning? In H. Seliger & M. Long (Eds.), *Classroom oriented research in second language acquisition* (127-143). Rowley, Mass: Newbury House.
- Deci, E. L. & Ryan, R.M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum.
- Hatch, E. (1978). Discourse analysis and second language acquisition. In E. Hatch E. (Ed.), *Second language acquisition: A book of readings* (401-435). Rowley, Mass: Newbury House.
- Kern, R. & Warschauer, M. (2000). Introduction: Theory and practice of network-based language teaching. In M. Warschauer & R. Kern (Eds.), *Network-based Language Teaching: Concepts and Practice* (pp.1-19). Cambridge: Cambridge University Press.
- 小早川悟ほか (2012) 「スカイプを用いた海外大学生とのコミュニケーションによる科学技術英語教育」平成24年度ICT利用による教育改善研究発表会 発表要項.
- Long, M. (1985). Input and second language acquisition theory. In S. Gass & C. Madden. (Eds.), *Input in Second Language Acquisition* (377-393).

- Rowley, Mass: Newbury House.
- MacIntyre, P.D., Clement, R., Dornyei, Z., & Noels, K. (1998). Conceptualizing willingness to communicate in a L2: A situational model of L2 competence and affiliation. *Modern Language Journal*, 82, 545-562.
- 三田薫 (2014) 「オンライン英会話を利用した短期大学英語授業の試み—フィリピン人講師との1対1のオンライン英会話レッスンを授業に取り込むことによる効果—」『実践女子短期大学紀要』第35号, 19-41.
- 文部科学省 (2016) 『日本人の海外留学状況』 http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/_icsFiles/afieldfile/2016/04/08/1345878_1.pdf (2016年7月18日取得)
- 永末美保 (2015) 「スカイプを用いた英語個別指導の学習効果と学生の反応」『九州共立大学紀要』第6巻, 第1号, 87-93.
- Pica, T., Young, R., & Doughty, C. (1987). The Impact of Interaction on Comprehension. *TESOL Quarterly*, 21(4), 737-756.
- Ryobe, I. (2009). Using Skype and Moodle at the university level for supplementary oral communication practice. *Proceedings of the GloCALL 2009 Conference*, 18-28. <http://glocal.org/home/course/view.php?id=11&sesskey=hRJW4eahNV> (2016年3月11日取得)
- 白井恭弘 (2008) 『外国語学習の科学』東京: 岩波書店.
- Vygotsky, L. (1987). *Mind in society*. Mass: Harvard University Press.
- Warschauer, M., Shezer, H., & Meloni, C. (2000). *Internet for English Teaching*. Maryland: Teachers of English to Speakers of Other Languages, Inc.
- Yashima, T. (2002). Willingness to communicate in a second language: The Japanese EFL context. *Modern Language Journal*, 86, 55-66.
- 八島智子 (2004) 『外国語コミュニケーションの情意と動機』東京: 関西大学出版部.
- 吉村紀子・中山峰治 (2010) 『海外短期英語研修と第2言語習得』東京: ひつじ書房.